

前事不忘 后事之師

関東大震災 90 周年にあたり被害者遺族を代表してのご挨拶

周江法（周瑞楷の孫）



日本の友人のみなさん、在日華僑、友人のみなさん、こんにちは！

私は周江法と言います。中国浙江省温州市瓯海区沢雅鎮桂川村から来ました。私の祖父周瑞楷と同じ村の 18 人が 1923 年 9 月、東京において殺害されました。

今日、私は被害者遺族の代表として、この上ない悲痛な心情を抱いて、祖父たちが惨死した受難の地を訪れ、90 年前、日本軍国主義によって惨殺された英霊を悼み、受難の先人たちに対し沈痛な哀悼を捧げます。

1921 年から 1923 年まで、わが村の 20 人が合法的な華工（*中国人労働者）として、日本の東京府下南葛飾郡大島町八丁目、七丁目に居住していました。1923 年 9 月 1 日の昼頃、関東地区で大地震が発生しました。9 月 3 日、日本は軍人や青年団を主体とする、いわゆる“自警団”を組織し、至る所で華工を包囲、虐殺しました。当日、わが村の 20 人の在日華工の内、18 人が 7 丁目で殺害されました〔当初は 7 丁目という報道があったが、正しくは 8 丁目〕。その中には私の祖父周瑞楷とその実弟である周瑞興、周瑞方、周瑞勳一家四兄弟がいます。これは全中国、全世界においても希にみる一家 4 人の惨殺、全滅という残酷な悲劇です。私の祖父が殺害されたとき、私の父周錫昌はまだ僅か 3 歳でした。私の祖母はこのことを知るや、病気になり、1924 年に病死しました。まだ幼い父は、父親が殺され、4 歳で母親が病死し、孤児となってしまったのです。父は幼くして苦労を重ね、曾祖母に頼ってどうにか生き延び、私たち子々孫々を残すことができたのです。

わが村では、日本で殺害された 18 人の内、跡継ぎを残せたのは、私たちを含めて僅か 3 人だけです。この 3 人は日本に行く前に既に結婚して子どもがいました。他の 15 人はまだ子どもがいなかったため、当人が日本で殺害された後、家族は離散し、家庭が崩壊してしまっただけです！

1923 年冬、日本から村の 18 人が殺害されたという消息が伝わりました。当時わが村は全体でも 30 世帯余り、100 人余りしかいない小さな村です。村中に悲憤があふれ、泣き声は 3 ヶ月以上も続き、悲憤はその後数十年にわたって続きました。わが家では 4 人も殺されたので、祖母は悲憤の余り病気になり、まともな治療さえ受けられないままこの世

を去りました。享年 25 歳でした。祖父たちの遺骨さえなかったので、祖母の遺体は今も大坪山に孤独に埋葬されたままです。

わが村以外でも、青田県仁庄鎮馮垵村の麻志標の祖父麻士海は家族を養うために日本に赴きました。1923 年 9 月、彼は東京の宿舎に居たとき、日本の自警団によって殺されました。その時、この消息が国内に伝わるや、人々はこぞって悲憤の余り泣き暮れました。祖父の死は、家族の大黒柱を失ったことを意味します。経済基盤を失った一家は生きてゆくことさえままなりませんでした。祖母の夏立丹は伝統的な“三従四徳”（* 古い時代に、女性が従うべきとされた三つの道と四つの徳。「三従」は「家にありては父に従い、嫁に出でては夫に従い、夫死しては子に従う」の三つ。「四徳」は「婦徳（女性らしい道徳）・婦言（女性らしいことば遣い）・婦功（家事）・婦容（女性らしい身だしなみ）」の四つ）の思想に基づいて、単身苦勞を重ねて子どもたちを育てようとしていましたが、女の細腕では一家 3 人を食べさせるもままならず、やむなく子どもたちを連れて、他家に嫁いでいきました。不幸にして、新たに嫁いだ先の夫は乱暴者で、彼女や子どもたちによく暴力を振るいました。度重なる不幸と迫害に苛まれた彼女は心身に異常をきたし、ついにはこの世を去りました。今、夫の遺骨さえ伴わない状態で、一人馮垵大坪山に埋葬されています。死してなお安眠できずにいます。なんと悲しいことでしょうか！

また、青田県油竹街道麻宅村の麻炳光の祖父麻祥陶も家族を養うために日本に行きました。しかし、不幸にして、1923 年の 9 月、東京の宿舎にいたとき、自警団に殺されました。この消息が伝わるや、全村が深い悲しみと怒りにつつまれました。祖母と子どもたちの悲痛はいかばかりであったことでしょう。身内が亡くなり、唯一の大黒柱を失ったのです。涙も枯れ果てました。残された家族に重圧がのしかかってきました。

彼の祖母には二男二女がいましたが、生活できず、やむなく二人の娘を「童養媳」（* トンヤンシー：成年前の幼女、少女を買い育てて将来男児の妻とする旧中国の婚姻制度の一つ。親、子供の世話以外に雑役に使われ、一種の家内奴隷とも見られる〔世界大百科事典〕）として送り出しました。寡婦となった彼女は苦勞に苦勞を重ねてようやく二人の息子を育て上げたのです。その後、老境に達した祖母も、本来ならば安らかで幸福な人生を終えるべきですが、若いときの過度の苦勞がたたなり、しばらくして亡くなりました。祖母は一生涯寡婦を貫きました。祖父の遺骨が無いまま、彼女の遺体も今五豊垵に孤独に埋葬されています。

死んだ人は、再び生き返ることはありません。生きている人は死者に成り代わって声を上げる必要があります。私たちは死んでいった人々に成り代わって、彼らの苦痛と恨み、憤怒を伝えねばなりません。それはこうした歴史の悲劇を二度と再演させない為です！この世界が永遠に野蛮から遠のき、この世界から戦争を遠ざけ、文明と平和を謳歌するため

です。私は受難者の末裔として、この事実を永遠に忘れず、正義を実現する責務を帯びています。

“前事不忘 后事之師”、私たちは歴史を記憶すべきであり、これを鑑として、中日両国の子々孫々にわたる友好と、世界の永久平和の為に弛まない努力をするべきでしょう。

この世を去って久しい先人たちよ、安らかなれ！

最後に、この場をお借りして、私は受難者遺族を代表して、みなさまに心よりの感謝を表します。特に私をこの場に招請して下さった田中宏、林伯耀先生をはじめとする日本と華僑の友人たち、そして千里の道程も厭わず、わが故郷までお越しいただき、私たち遺族を捜し出してくれた朱弘先生、呉祖康、周建新ご夫妻に感謝いたします。あなた方が私たちにこの機会を与えて下さったのです。私たち受難者の数十年にわたる、受難の地を訪れ、先人たちの魂を祀りたいという念願がようやく叶ったのです。

あらためて、みなさまに対し、心から感謝申し上げます！

2013年9月8日

黄子森らたくさんの方が殺され、黄子蓮だけが生き残った

黄建豊（黄子蓮の曾孫）



集団虐殺現場で黄子蓮の曾孫 黄建豊が語る

皆様こんにちは！

私の名は黄建豊で、黄子蓮の曾孫にあたります。浙江省温州市瓯州瓯海区澤雅鎮杭源村の出身です。

本日、私の曾祖父 黄子蓮の兄である黄子森が、日本でどのように殺害されたのか、その過程をこの上ない悲痛な心情でもって皆様に語らせて頂きます。そして、曾祖父の兄 黄子森のように、同じく日

本で難に遭われた先輩諸氏に深い哀悼の意を表します。

1923年9月、日本の関東大震災が起こった当時、軍国主義思想を植え付けられた一部の在郷軍人、自警団、社会青年団（以下、これらを日本の暴徒と記す）などが、震災の社会的混乱に乗じて浙江省温州・処州（現 麗水市）出身の在日中国人労働者数百人を惨殺しました。日本の暴徒は大島町八丁目において174人を虐殺しましたが、私の曾祖父 黄子蓮は、まさにその現場における唯一の生存者であり、目撃者でした。

曾祖父の黄子蓮は永嘉県二十三都杭源村（現 瓯海澤雅鎮）出身、日本に出稼ぎに行く前は、家族が7～8人おり、耕せるのは山にある数ムーの田畑のみであり、生活していくには厳しい状態でした。そういった貧困が理由で、第一次大戦後、黄子蓮は兄の黄子森、そして同村の黄岩池、黄景軒、黄程圀などとともに日本へ出稼ぎに行きました。

1922年閏五月、彼らの出稼ぎ先は東京大島町であり、同郷の人間が営む小さな宿屋に住み込んでいました。狭い一間に十数人が詰めるように居住しており、仕事は朝早くに出て夜遅くに帰り、一日の給与は二～三円ほどで、生活は極めて苦しかった。

曾祖父ら数人が日本で一年余り働いていたとき、関東地区にて大地震が発生しました。この地震は1923年9月1日の正午から8日まで続き、地震発生の二日目、彼らは大島町五丁目の林合記の宿屋から八丁目の林合吉の宿屋に移りました。この時も状況はなお落ち着いてはおらず、四方は火の海となっており、人々は戦々恐々としていました。翌日の夜、

曾祖父と同郷者 170 人余りがまさに自分の身の安全を心配していたそのとき、突然数百人の凶器を手にした日本の暴徒が宿屋に押し寄せてきました。暴徒はまず中国人を宿屋の外にある空き地に追いやり、その後「地震が来るぞ！みな地面に伏せろ！」と叫びました。曾祖父ら 174 人が一斉に地面に伏せると、残虐非道な暴徒は斧や鉄棒、鉄鉤、刀などで、物理的にも意識的にも無抵抗な中国人を斬り、突き、刺し、その結果、黄岩池や黄景軒、黄程圀を含む温州と処州出身の中国人 173 名が命を落としました。曾祖父の黄子蓮は頭部と右の背中に大穴があくほどの傷を負い、失神して同郷の死体に埋もれていましたが、なんとか死の淵から生き返ってきました。

林合吉の宿屋の外にある空き地には死体が累々と横たわり、流血の河となっていました。暴徒は温州、処州の中国人を殺害してから、死者が身につけていた金を奪い、曾祖父は持っていた 30 枚の銀元を持ち去られました。死体に挟まれ倒れていた曾祖父は目を覚ますと、死体を押し分け、宿屋付近にある蓮畑まで這っていき身を隠しました。彼は日本の暴徒に見つかって再度襲われることを恐れ、夜は畦道で仰向けになって横たわり、日中は蓮畑で蓮の葉に身を隠していました。

9 月 4 日の夜、曾祖父は八丁目から七丁目のある空家に逃れました。5 日朝 7 時頃、曾祖父は飢えと渴きから食料を求めて空家から出たところ、またも日本の暴徒に遭遇し、連れ去られてしまいました。しかし連行されるその途上、一人の警察がこちらにやって来るのが見えたので、曾祖父はすぐ、「助けて！助けてくれ！」と大声で叫んだところ、その声を聴いた警察はこちらに急いでやって来て、重傷した中国人を確認し、すぐさま暴徒たちから解放させた。その後は黄子蓮を小松川に送って軍に引き渡し、さらに軍から千葉の習志野収容所に彼を移送しました。

習志野収容所には一千人余りの中国人が収容されており、そのほとんどが温州と処州の同郷者でした。曾祖父とその他の罹災中国人は一様に日本の暴徒の監視を受けており、終日恐怖を感じながら過ごしていました。食事は毎日卵ほどの大きさの握り飯を三つ与えられるのみであり、寒村出身の曾祖父はこのような地獄の生活を初めて経験した。

1923 年 10 月 8 日、曾祖父らは上海に到着しました。彼は十六鋪港から上陸すると、温州旅汙同郷会と上海協済日災会の熱烈な歓迎を受けました。祖国の同郷者が日本に出稼ぎに行っていた自分や同郷の仲間を歓待してくれるなか、自身が日本で遭遇した災難や仲間が惨殺された情景を想起し、熱い涙が溢れるのを禁じ得ませんでした。彼は温州旅汙同郷会長およびメンバーに関東大地震時に中国人同胞が日本の暴徒によって虐殺された状況、そして自己の九死に一生を得たその過程を語り、さらに上海新聞界に日本の軍国主義の暴挙を涙ながらに訴えました。

曾祖父は故郷に帰ったものの、負傷した傷を治療する金もなく、1924 年 5 月に実家の

杭源村で病死しました。曾祖父は一家の大黒柱でした。彼の死は、一家全員をこの上ない悲しみに陥れ、さらには極度の貧困状態にも陥れました。

その他数名の同郷である黄岩池、黄景軒、黄程圉、黄子森らはみな一家の大黒柱でした。彼らが日本で惨殺され、その訃報を知った四家族は泣き叫び、悲痛に打ちのめされました。

黄岩池の父である黄加環は息子が異国で惨死したことを知り、そのショックに耐え切れず、病に伏せてしまい、何日も食事をとれませんでした。母親の麻氏もまた病で倒れ、翌年6月に亡くなりました。すべての家庭はこのように崩壊していったのです。

黄景軒の父の黄忠寿はもともと体が悪く、息子の訃報を聞いてからは痴ほうになり、生活を送れないほどになってしまいました。母の陳氏は終日涙を流し続け、7年後には鬱のあまり亡くなりました。

黄程圉に親族はいませんでした。

死んだ人間は返っては来ません。生きている者は強くならねばならない。我々は怒りを感じているが、しかし歴史の悲劇を繰り返さないことを望んでいます。

我々の後代がよりよい平和な環境を創造し、中日両国人民が幸福になるため、私たちは中日の社会の各分野の人々がこの歴史に関心を持つことを望みます。私たちは団結して日本政府の歴史的罪行を追究し、歴史の公道と正義を取り戻しましょう。